

一五世紀におけるソルボンヌ学寮成員の出身地に関する考察

佐藤 剛

はじめに

パリ大学が中世末期の西欧社会において果たした役割と影響力を総合的に考察する際、その団体を構成する学生と教師の出自や社会的経歴、また人的関係に関する体系だった研究が不可欠である。しかしながら、今日尚この分野における研究は十分とは言えない。その根本的な要因として挙げられるのは、登録簿の不在という史料上の制約である。パリ大学では中世を通じて一学部においてであれ、ナシオにおいてであれ一学生と教師の総合的な登録簿は作成されず、イギリス人・ドイツ人ナシオが登録簿を作成し始めたのが一五世紀後半のことである。それゆえ、私たちがパリ

大学の学生と教師の氏名や出自、社会的経歴を知ろうとするならば、大学の規約や議事録、特許状などの公的文書から個人的な書簡、文学作品に至るまで、多岐に亘る様々な史料に現れる断片的な情報を網羅的に収集せざるを得ないのである。

本稿で私が試みるのは、パリ大学神学部の在俗聖職者系学生達のための一学寮であったソルボンヌ学寮の成員のリストを作成し、彼らの出身地について考察することである。J・ファヴィエによると、一五世紀前半におけるパリ大学の学生と教師の人口は約三〇〇〇〜四〇〇〇人であった。⁽¹⁾ そのうち神学部の学生と教師は約三〇〇人に見積もられている。この当時、ソルボンヌ学寮の定員は約三〇〜四〇人であったので、神学部の教師と学生のうち一〇人に一人が

ソルボンヌ学寮に籍を置いていたことになる。また、ソルボンヌ学寮の主な受入対象となる在俗聖職者系学生に限るなら、五人に一人が籍を置いていたと推定される。⁽²⁾ 学寮の規模としては、ソルボンヌ学寮よりもナヴァール学寮の方が大きかった。しかし後者が神学部⁽²⁾の学生のみならず学芸学部の学生も受け入れ、また学生の募集が特定の教区に限られていたのに対し、前者においては神学部の学生であれば出身教区は特定せず、四つのナシオの規模に応じて等しく募集がなされた。そのため、ソルボンヌ学寮の学生の出身地を考察することは、パリ大学神学部の学生出身地分布及び地理上の影響力を考察する際の一助となるものと考えられる。

本稿では、具体的に以下の三つのことを試みる。まず初めに、ソルボンヌ学寮図書館の書籍貸出名簿を主要史料として、学寮の会員リストを作成すること。そして次に、彼らの出身地分布図を作成し、学寮の人的吸引圏あるいは地理的影響力を考察することである。更に、学寮の会員数の推移を、学生の出身教区又は地域ごとに考察する。尚、史料の都合上、対象とする時代は一五世紀に限定する。

I 史料と寮生リストの作成

(i) 書籍貸出名簿⁽³⁾

一二八九年以降、ソルボンヌ学寮図書館には二種類の書庫が存在していた。まず一つは大書庫 (*magna libraria*) である。大学での勉強に不可欠な基本的な書籍がそこに収められ、ソルボンヌ学寮内外の多くの学生に閲覧が許された代わりに、盗難防止のため、全ての本は鎖で書見台に繋がれ、館外への貸出は原則としてなされなかった。もう一つは小書庫 (*parva libraria*) である。この書庫はソルボンヌ学寮の会員のみが利用できた。後述するように、ソルボンヌ学寮の会員には、正規会員と準会員の区別があったが、小書庫へ入るための鍵を所持することが許されたのは正規会員のみであり、準会員が書庫へ入庫する際には、正規会員がその保証人となる必要があった。したがって、小書庫の書籍の閲覧及び貸出は、基本的にソルボンヌ学寮の会員に限られたが、貸し出される書籍と同価値以上の担保を預けることによって、学寮外の人間に貸し出されることも稀にあった。この際にも、準会員が利用する場合と同様に、正規会員がその保証人となることが求められた。そして書庫を利用する際には、全ての利用者に対し書籍貸出名簿に登録することが義務付けられた。

一三三八年の蔵書点検で作成された目録によると、ソルボンヌ学寮図書館の蔵書総数は一七二二冊であり、その内

三四四冊が大書庫に、一一四〇冊が小書庫に収められ、二八九冊が欠本であった⁽⁴⁾。これだけの蔵書を有するソルボンヌ学寮図書館は、当時のパリにおいて最も充実した図書館であり、その小書庫の蔵書を自由に利用できることは、いわば勉強を行う上でソルボンヌ学寮の成員にのみ与えられた特権であったと言える。そのことは、ソルボンヌ学寮の図書館を利用したいがためにソルボンヌ学寮への受け入れを望む学生がいたことから推察される。そのため、ソルボンヌ学寮の成員のほとんどが小書庫の蔵書を利用したと考えて差し支えなからう。そして、この書籍貸出名簿を調査することで、一五世紀にソルボンヌ学寮に在籍した学生の全てとは言わずとも、その大部分の名前をほぼ網羅的に把握することができると思われる。とは言え、ソルボンヌ学寮図書館をまったく利用しなかった学寮成員の存在も考慮する必要がある。この点を補完するため、学生のリストを作成するにはソルボンヌ学寮における定例会議の議事録であるプリオールの書も参照した⁽⁵⁾。

(ii) ソルボンヌ学寮の成員リストの作成と分析対象の設定

一五世紀において、ソルボンヌ学寮の居住者は四つのカテゴリーに分類することができる。第一に正規成員 (*socii*)、

第二に準成員 (*hospites*)、第三に奉仕学生 (*clerici*)、最

一五世紀におけるソルボンヌ学寮成員の出身地に関する考察

後に外部者である⁽⁶⁾。厳密に言って、正規成員のみが、学寮の運営に携わる権利と義務を担うと同時に、その恩恵に与ることができた。しかし、私は考察の対象とするソルボンヌ学寮の成員の中に、第二のカテゴリーである準成員も加えることにした。その理由として三つのことが挙げられる。まず一五世紀において、準成員はしばしば正規成員の重要な予備軍もしくは補欠であったからである。つまり、入寮の希望者が直接に正規成員として学寮に受けられることは稀で、一旦準成員として受け入れられた後、審査を経て正規成員になるケースが多かった。第二に、一五世紀のソルボンヌ学寮において、準成員は無視するにはあまりに数が多かった。実際、準成員の数は、正規成員の約三分の一に匹敵した。第三に、準成員は、学寮の運営に参与する資格が無いという点を除けば、学寮内で正規成員と同じ権利と義務を有していたからであり、前述したように、図書館の小書庫の蔵書を利用することもできた。

ソルボンヌ学寮図書館の書籍貸出名簿には三七三人が記載されているが、そのうち三四四人がソルボンヌ学寮の学生 (正規成員二五七人、準成員八〇人、正規成員か準成員か不明な者が七人) であり、二人が奉仕学生、二五人が外部者、二人が身元不明であった。つまり、書籍の借用者、もしくは単なる閲覧者の九二%がソルボンヌ学寮の成員で

あった。また、書籍貸出名簿には現れないものの、プリオールの書にのみ見出される学生が三一人いた。その結果、一四〇二年から一五三六年の間に、三七五人のソルボンヌ学寮の成員を確認することができた。そのうち、本稿で分析の対象とするのは、一五世紀にソルボンヌ学寮に在籍していた三二七人である。分析に際しては、学寮の成員を在俗聖職者 (*saecularis*) と修道会士 (*regularis*) に分類した。そして前者に関しては、出身教区、出身地、及び所属ナシオを、後者に関しては、所属修道会及び修道院について調査した。三二七人の学寮の成員のうち、出身地の判明した院の判明した修道会系学生は二〇六人で、全体の六三%。出身修道院の判明した修道会系学生は五三人で、全体の二一%であった。つまり、ソルボンヌ学寮の成員の約八〇%に関して、その出身教区または出身修道院を明らかにすることができた。

II ソルボンヌ学寮の学生の出身地分布

(i) 在俗聖職者系学生

パリ大学を訪れた学生は、その出身地に依じて、四つのナシオ (*natio*) の何れかに必ず加わらねばならなかった。

ナシオとは、出身地を同じくする学生と教師が連帯と相互扶助を目的として集合した大学の下部組織であり、パリ大学にはイギリス人・ドイツ人ナシオ、ピカルディー人ナシオ、ノルマンディー人ナシオ、フランス人ナシオの四つが存在していた。そこで、一五世紀の間にソルボンヌ学寮に在籍した在俗聖職者系学生を、所属ナシオ毎に分類してみると以下の通りになる。イギリス人・ドイツ人ナシオ所属者三三人 (一六%)、ピカルディー人ナシオ所属者三四人 (二七%)、ノルマンディー人ナシオ所属者三九人 (一九%)、フランス人ナシオ所属者一〇〇人 (四八%)。ソルボンヌ学寮では、四つのナシオの規模に応じて等しく学生が募集されたので、ソルボンヌ学寮における各ナシオ出身者の比率は、パリ大学におけるナシオの規模を反映しているものと考えられる。

(a) イギリス人・ドイツ人ナシオ

イギリス人・ドイツ人ナシオには、今日のイングランド、スコットランド、ドイツ地域出身の学生以外に、ムーズ川を境として以東のリエージュ、ユトレヒト両司教区、及びスカンディナヴィア半島、エルベ川以東出身の学生が受け入れられた。学生の募集領域は、他の三つのナシオに較べて最も広大であった。しかし実際には、一五世紀のソルボン

ヌ学寮の学生を見る限り、イングランド及びエルベ川以東の学生を見出すことはできない。イングランドに関して言えば、早い時期からオックスフォード大学とケンブリッジ大学という在地の大学が存在しており、わざわざパリへ学びに来る学生は多くなかった。その傾向を決定的にしたのは、英仏百年戦争の勃発である。その結果、一四世紀中葉にはイングランド出身の学生はパリ大学から姿を消していった。⁽⁷⁾ 神聖ローマ帝国地域に関しても、比較的パリに近いライン川沿いの出身者が多く、東側出身者の学生は皆無である。ソルボンヌ学寮におけるイギリス人・ドイツ人ナシオ所属学生三三人の出身地ごとの内訳は以下の通りである。ユトレヒト司教区九人、スコットランドとフィンランドが各三人、コンスタンツとアウグスブルク司教区が各二人、バーゼル、ストラスブル、ローザンヌ、シュタイン、ブレーメン司教区及びスウェーデンが各一人、出身地不明八人。便宜上、パリから四五〇km圏内を近距離圏、四五〇kmから六五〇km圏内を中距離圏、六五〇km以上を遠隔地として分類してみると、出身地が判明している学生のうち、近距離圏内の出身者が一二人で全体の半数近くを占めており、とりわけユトレヒト教区の出身者が多い。また中距離圏の出身者は六人、遠隔地出身者が七人となっている。また、近距離及び中距離圏の出身者が一五世紀を通じてソルボン

ヌ学寮に受け入れられているのに対し、遠隔地出身者は一五世紀の中葉を境に姿を消す。

一三世紀以来、多くのスカンディナヴィア半島出身の学生がパリで学んでいた。一三世紀の末から一四世紀の初頭にかけては、ウプサラ学寮、リンシェーピング学寮、スカラ学寮といったスカンディナヴィア半島出身の学生のための施設が多く作られた。一五世紀になると、ロストック大学（一四一九）、グライコスヴァルト大学（一四五六）、ウプサラ大学（一四七七）、コペンハーゲン大学（一四七八）が創設され、このことは北欧地域の大学進学者の絶対数を著しく増加させた。⁽⁸⁾ しかしながら、多くの学生が新設された地元の大学に通う中、一定数の富裕な学生は、依然としてパリ大学へ通い続けたことがわかっている。その理由は、一五世紀のフィンランドの高位聖職者のほとんどがパリ大学の学位を取得していたことから明らかのように、パリ大学での就学は一種のステータスであり、パリでの学位が彼らに祖国での出世を保証したからである。⁽⁹⁾ とは言え、幾つかのケースが示しているように、フィンランドの高位聖職者の多くは、パリ大学の学芸学部⁽¹⁰⁾の学位しか有していなかった。つまり、彼らは学芸学部の学位を得た後、神学部には進まずに帰国した可能性が高く、少なくとも神学の学位は得ていなかったのである。一五世紀中葉を境として、ソル

ボンヌ学寮からスカンディナヴィア半島出身の学生の姿が消えたのは、このような傾向を裏付けるものではなからうか。

スコットランド出身の学生にも同様のことが言えよう。

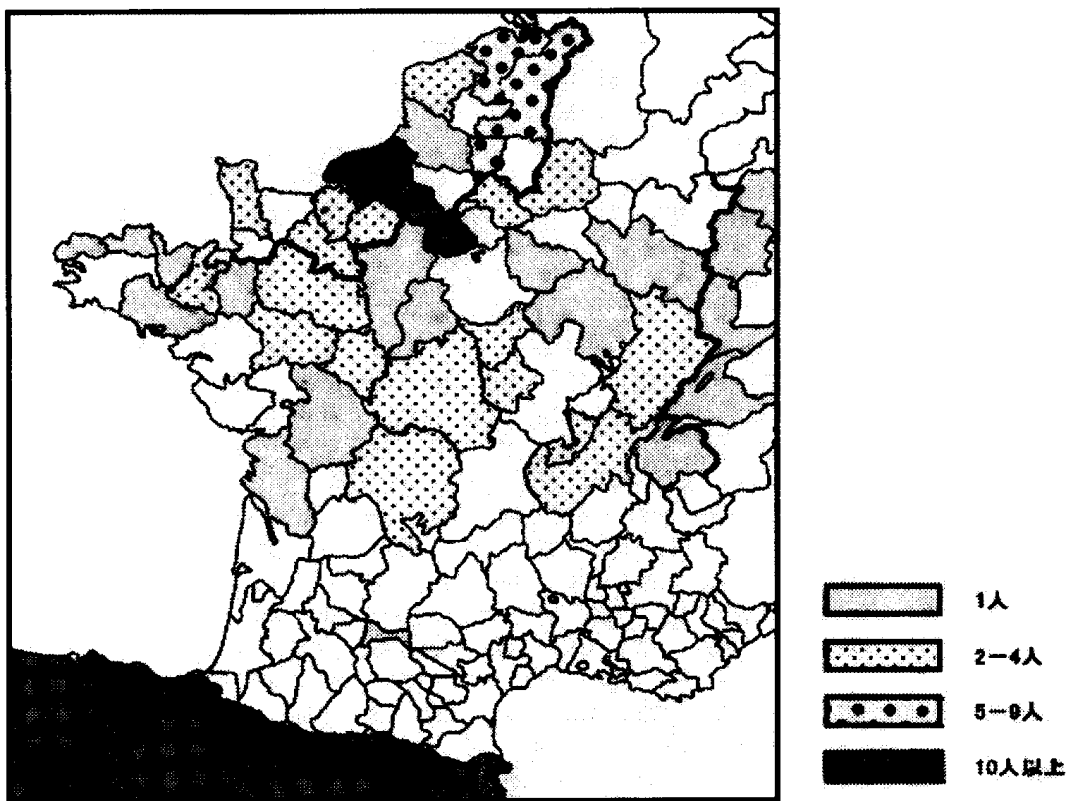
一四世紀初頭までイングランドの大学で学んでいたスコットランド人学生は、プランタジネット朝イングランドからの独立戦争を機に、政治的な事情からオックスフォード大学やケンブリッジ大学よりも、大陸のパリ大学で学ぶことを選択するようになり、シスマの勃発後、その傾向はさらに強まった⁽¹⁰⁾。一五世紀に入ると、スコットランド人学生が一時的にパリから姿を消す。その背景には、一四一八年に始まるイングランドによるパリ占領といった政治的事件が大きく影響していた⁽¹¹⁾。また、一四一三年にはスコットランド初の国民的大学であるセント・アンドリュース大学が創設されているが、この大学の創設は、この国における大学進学者の絶対数を増加させたものの、パリ大学の学生募集に与えた影響はほとんどなかったと思われる。というのも、一四三六年にシャルル七世がイングランドからパリを奪還すると、パリ大学におけるスコットランド人学生の数は再び増加に転じたからである。一四八四年にはパリ大学におけるスコットランド出身学生の数は頂点に達し、セント・アンドリュース教区出身者だけでも一二人が在籍していた⁽¹²⁾。

一方ソルボンヌ学寮においては、一四世紀後半から一五世紀前半にかけて、一定数のスコットランド出身学生の存在が確認されるが、一五世紀の中葉を境として姿を消す。一五世紀後半のパリ大学において、神学部のスコットランド人学生に門戸を開いていた学寮は、ソルボンヌ学寮以外になかったことを考えると、この時期には神学部に進むスコットランド人学生はほとんどいかなかった可能性が高い。

(b) ピカルディー人ナシオ

ピカルディー人ナシオは、ランス大司教区及びミューズ川以西、すなわち今日のベルギー全域とオランダの南部出身の学生を受け入れた。募集領域は、フランス人ナシオやイギリス人・ドイツ人ナシオに比してかなり狭いが、一五世紀中に、イギリス人・ドイツ人ナシオに所属する学生とほぼ同数の学生がソルボンヌ学寮に受け入れられている。

一四一八年にブルゴーニュ公ジャンがパリに入城し、パリがイングランドの占領統治にあった一四三六年までの時期には、政情不安からパリの学生人口が激減し、それはピカルディー地方の学生とて例外ではなかった。ソルボンヌ学寮においては、一五世紀の最初の十年間には七人いたピカルディー人学生が、一四四〇年代には一人にまで激減している。しかし、一四三五年にアラスにてフランス王家と



15世紀におけるソルボンヌ学寮の学生の出身地分布

ブルゴーニュとの和議が成立し、その翌年、シャルル七世がイングランドからパリを奪還し、次第に治安が回復してくると、ピカルディー人学生の数が増加し、一四六〇年代には六人にまで回復する。

一四〇三年にフランスの諸大学がアヴィニヨン教皇庁へ提出した「聖職禄請願状」を史料として、フランス国内の諸大学の規模と学生募集領域を統計的に提示したJ・ヴェルジェによると、ピカルディー地方出身の学生の約八割がパリ大学へ進学していた。また、パリ大学学芸学部における学生の出身を地方 (province) ことに分析してみると、ノルマンディー地方出身学生が最も多くて全体の41%を占め、次いでピカルディー地方出身の学生が全体の22%を占めていた⁽¹³⁾。一五世紀の初頭まで、ピカルディー地方の学生にとって、パリ大学は最も近い距離にある大学であり、彼らが勉学を行う場としてパリ大学を選択したのは当然のことであったと考えられる。

パリがイングランドの占領下にあった一四二五年一二月九日、教皇マルティヌス五世の教書によって、ルーヴァン大学の創設が承認された。設立当初は、学芸学部、法学部、医学部しか存在しなかったが、一四三一年三月七日には、教皇エウゲニウス四世によって、神学部の創設が承認された。ルーヴァン大学の組織はパリを模倣したものであり、

教師の多くはケルン大学やパリ大学で学位を取得した者が招聘された。また、政治的混乱と治安悪化のためにパリで勉学を続けられなくなった多くの学生がルーヴァン大学へやってきたと考えられる⁽¹⁴⁾。しかし、一五世紀を通じてパリ大学とルーヴァン大学の間には絶えず交流があり、一四一八年から一四三〇年代半ば頃までのパリの混乱期を除けば、ルーヴァン大学の創設がパリ大学の学生募集に直接影響を与えることはほとんどなかったと考えられる。その理由としては、A・L・ガブリエルが、パリ大学からルーヴァン大学へ転出した学生より、ルーヴァン大学からパリ大学へ転出した学生の方がより高い社会的地位を得ていることを示したことから推察されるように、パリ大学で得た学位が学生に立身出世の保証を与えたからに他ならない⁽¹⁵⁾。また、ピカルディー地方は、パリ大学とルーヴァン大学のほぼ中間に位置し、パリ大学は依然としてこの地方の学生にとって最も近い大学であった。ソルボンヌ学寮において、一五世紀の後半にピカルディー地方出身の学生数が回復したのは、このような傾向を反映している。

ピカルディー地方の司教区において、最も多くの学生をパリ大学に送り出しているのはアミアン司教区(一九%)であり、次いでランス司教区(一六%)、ラン司教区(一三%)、カンブレ司教区(一〇%)、テルアンヌ司教区(一

〇%)、ソワッソン司教区(七%)、ボーヴェ司教区(六・五%)、ノワイヨン司教区(五・五%)の順になっている。一方ソルボンヌ学寮についてみると、アミアン司教区出身の学生はわずか三%に過ぎず、ランス司教区に至っては皆無である。ラン司教区の学生も三%と少ない。むしろ反対に、ソルボンヌ学寮で最も多いのは、パリ大学においては僅か五%に過ぎないトゥールネ司教区出身の学生(二六%)であり、次いでノワイヨン司教区(一五%)、カンブレの司教区(一五%)の学生となっている。

一三世紀以来、多くの学生をパリ大学へ送り続けてきたピカルディー地方の各司教区の司教や聖俗の有力者は、自らの司教区出身の学生たちの生活を保障し、学業に専念できるように多くの学寮を創設してきた。一五世紀に、主にピカルディー地方出身の神学部学生を受け入れるために存在していた学寮は以下の四つである。シヨレ学寮(一二五九)、ドルマン―ボーヴェ学寮(一二七〇)、プレスル学寮(一二三二四)、そしてカルディナル・ルモワヌ学寮(一三〇二)。

シヨレ学寮には、ボーヴェ司教区とアミアン司教区出身の学生が受け入れられ、ドルマン―ボーヴェ学寮には、ボーヴェ司教区の他に、ソワッソン司教区とランス司教区出身の学生が受け入れられた。プレスル学寮は、別名ラン・ソ

ワッソン学寮とも言い、その名の通りラン司教区とソワッソン司教区出身の学生のための学寮であった。カルディナル・ルモワヌ学寮には、司教区に拘わらず、ピカルディー地方出身の学生が受け入れられ、またピカルディー地方出身の学生のための学寮ではないが、ナヴァール学寮もピカルディー地方出身、とりわけランス司教区出身の学生を多く受け入れていた。この点については、フランス人ナシオの項目において後述する。以上のように、ソルボンヌ学寮に受け入れられたピカルディー地方出身の学生はほとんどは、出身教区の学寮を有さないトゥールネ、ノワイヨン、カンブレといった司教区の出身者であり、出身教区の有力者によって設立された学寮を有するアミアン、ボーヴェ、ソワッソン、ランといった司教区出身の学生はほとんど受け入れられていなかった。

(c) ノルマンディー人ナシオ

ノルマンディー人ナシオは、ノルマンディー地方ルーアン大司教区、すなわちルーアン、エヴルー、リジュー、セエズ、バイユー、クータンス、アヴランシュの七司教区出身の学生を受け入れた。他のナシオに比して、学生の募集領域は最も狭いものの、この地域出身の学生数は非常に多く、とりわけルーアン司教区出身の学生は全司教区の中で

最も数が多い。ソルボンヌ学寮に受け入れられたノルマンディー地方出身の学生のうち、ほぼ半数がルーアン司教区の出身者であった。ピカルディー地方同様、ノルマンディー地方の学生にとっても、パリ大学は最も近距離にある大学であり、約八割の学生がパリ大学に進学していた。

一五世紀の中葉まで、ソルボンヌ学寮におけるノルマンディー地方出身の学生は、一四一〇年代に一時減少するものの、ある一定数の存在が確認される。しかし、一五世紀後半には急激に減少する。とりわけこの地方の出身学生の大多数を占めるルーアン司教区の学生に関して言えば、一五世紀中に二〇人がソルボンヌ学寮に受け入れられているが、そのうち一七人が一四四〇年代までに受け入れられており、一五世紀後半には、一四六〇年代に三人の在籍が確認されるのみである。ソルボンヌ学寮内における、このノルマンディー地方出身学生の明らかな減少の背景には、カーン大学の創設の影響が考えられる。

カーン大学は、ノルマンディー地方一帯がイングランドの統治下にあった一四三二年一月、イングランド王ヘンリ四世によって創設された。その目的は、イングランドによるノルマンディー統治を確固たるものにするため、有能な官僚を育成することであった。¹⁶⁾そのため当初、この大学には市民法学部と教会法学部しか創設されなかった。またこ

の当時、パリ大学もイングランドの掌中にあつたため、カーン大学に神学部が創設されなかつた背景には、パリ大学の優越性を保証し、両大学の対立を緩和する配慮があつたものと考えられる。しかし一四三六年四月、シャルル七世がイングランドからパリを奪還し、パリ大学がフランス国王の手に帰すると、フランスにおけるイングランド領内にはもはやカーン大学しか存在しなくなり、ヘンリ四世は、そこに学芸学部と神学部、更には医学部を新たに創設した。一四三七年二月一日、ヘンリ四世は教皇エウゲニウス四世からこの新設大学の認可を得るための資金一六〇〇リールを調達するために、ノルマンディーの諸身分に対し新たな税を課した。その結果、同年五月二六日、教皇エウゲニウス四世は、教書においてこの大学の存在とその諸特権を確認するとともに、バイユー司教を尚書局長に任命して、彼に学位授与権を認めた。さらに、一四三九年の五月十七日には、リジューとクータンスの両司教を学位授与権保持者に任命した。

カーン大学の組織は、パリ大学をモデルとして構成されたが、ナシオは存在しなかつた。この事實は、カーン大学の地方的性格を証明するものである。大学長は、大学の全構成員の中から、上記の五つの学部の代表者によって、六ヶ月ごとに選出された。ヘンリ六世は、カーン大学に対す

る財政援助と優遇措置を惜しみはしなかつたが、一方では大学人の反対を押し切つて、大学への課税に踏み切つた。シャルル七世がカーンを奪回した後、一四五〇年七月三日の勅令において、彼は市民法と教会法の二学部については、その活動を禁止したものの、他の学部に関してはその活動の存続を認めた。そして、一四五二年一月三日の勅令においては、パリ大学の激しい反対にもかかわらず、五つの学部と諸特権を有する大学として再生することを承認した。

以上のように、カーン大学はイングランド王によるフランス統治政策の一環として設立されたものであつたが、ノルマンディー地方に創設された初の大学であり、設立当初から極めて地方的な性格を有していた。また、一五世紀まで大学の存在しなかつた東欧や北欧とは違い、パリに近いため多くの学生人口を有していたノルマンディー地方では、カーン大学の創設がこの地方の学生の絶対数の増加に大きな影響は与えなかつたと考えられる。一五世紀後半における具体的なカーン大学の学生募集について調査しない限り断言はできないが、むしろこの大学の創設は、結果として、パリ大学におけるノルマンディー地方出身学生を吸収する役割を果たしたのではなからうか。

(d) フランス人ナシオ

フランス人ナシオは、以上のランス・ルーアン両大司教区とアルザスなど東部の一部地域を除いた今日のフランス全域に加えて、イタリアとイベリア半島出身の学生を受け入れた⁽¹⁷⁾。以下では、ソルボンヌ学寮に受け入れられたこれらの地域出身の学生について、三点に絞って考察を試みる。

まず第一に、フランス人ナシオの募集地域は広域であるにも拘らず、実際には、一五〇〇年に一人、モントバン司教区の学生が受け入れられているのを除けば、一五世紀を通じて、南フランス出身の学生は皆無で、学生の出身地が、今日のフランスの中部から北部に偏っているということである。この理由としては、二つのことが考えられる。まず一つには、南フランスには既にモンペリエ大学、トゥールーズ大学、アヴィニオン大学が存在しており、これらの大学が非常に地域的な性格を有して、南フランス出身の多くの学生をひきつけて成功していたということである。実際、トゥールーズ地方、オック地方及びリムーザン地方南部の諸教区、またアジャン、ペリグー、ヴィヴィエ司教区では、学生人口の半数以上がトゥールーズ大学で就学していた⁽¹⁸⁾。とりわけ、トゥールーズに近づくほどにその割合は高かった。またこれらの地方において、トゥールーズ大学で就学しなかった学生は、モンペリエ大学やアヴィニヨ

ン大学で就学するものが多く、パリへ向かうものはごく僅かであった。同様に、アグド、ロデーヴ、マグローヌの司教区では学生人口の九割近くがモンペリエ大学で就学し、カルパントラ、カヴァイヨン、エクス、リエ、トゥーロン、アンブラン、グランデーヴの司教区では八割近くの学生がアヴィニオン大学で就学していた。これらの司教区においても、パリ大学へ向かうものはごく僅かであった。もう一つは、J・ヴェルジェが述べているように、南フランスの学生は神学よりもむしろ世俗的な学問に関心を抱き、北フランスの諸大学よりもイタリアの大学を目指す傾向にあった⁽¹⁹⁾ということである。実際に、ボローニャ、パドヴァ、フェラーラといったイタリアの諸大学では、数多くの南フランス出身の学生を見出すことができる。ソルボンヌ学寮における南フランス出身学生の不在はこの傾向を裏付ける結果といえよう。

次に、フランス中部から北部におけるソルボンヌ学寮の募集領域を見ると、パリに隣接するサンス司教区や近郊のトロワ、シャロン・シュル・ソーヌ、ラングル、オータン司教区出身学生の不在もしくは希少さを読み取ることができる。これらはいずれも、学生の半数以上をパリ大学へ送っている司教区である。とりわけトロワ司教区では九一%、シャロン・シュル・ソーヌ司教区では七五%、ラン

グル司教区では八三%の学生がパリで就学しており、パリ大学における彼らの数が少ないわけではない。むしろ、ピカルデー地方やノルマンディー地方同様、パリ大学における重要な学生供給地であった。恐らく、ソルボンヌ学寮におけるこれらの司教区出身学生の少なさの背景には、ナヴァール学寮の影響を指摘することができる。

ナヴァール学寮は、フランス国王フィリップ・ル・ベルの妃ジャンヌ・ド・ナヴァールによって一三〇五年に創設された。一三一五年の規約によると、文法学生、学芸学部、神学部の学生七〇人が奨学生として受け入れられており、その内訳は文法一八人(二六%)、学芸学部三〇人(四三%)、神学部二一人(三二%)であった。⁽²⁰⁾一四世紀初頭におけるソルボンヌ学寮の定員が約二〇名であったので、ほぼ同数の神学部の学生を受け入れていたことになる。学生の募集領域は、当時のフランス全域に亘ったが、サンス地方、ランス地方、ルーアン地方、トゥール地方など北部出身の学生が全体の八割以上を占めていた。しかし、一四世紀末から一五世紀初頭になると、実際の学生募集領域は北東部に偏り、定員八八人のうち六〇人(約七〇%)がパリからシャンパーニュ、ピカルデー地方にかけてのフランス北東部の出身であった。次いで多いのはブルゴーニュ地方の出身者で一三人である。神学部学生に限定してみると、

定員三六人のうち、ランス司教区とトロワ司教区の出身者が最も多くて各六人。次いでパリ司教区とラングル司教区の出身者が各四人。ルーアン司教区出身者が三人。カンブレ司教区とノワイヨン司教区の出身者が各二人となっている。つまり、ナヴァール学寮に多く受け入れられている学生は、ソルボンヌ学寮ではほとんど受け入れられていない司教区出身の学生であり、ナヴァール学寮における学生募集が、ソルボンヌ学寮におけるそれに大きな影響を与えていたものと考えられる。

また、パリに隣接しているにも拘らず、ソルボンヌ学寮でもナヴァール学寮でも少数のシャルトル及びオルレアン司教区の学生に関して言えば、彼らはパリ大学よりもオルレアン大学へ進む傾向が強かった。一五世紀の初頭、シャルトル司教区の学生の約五三%、オルレアン司教区に至っては、その約九〇%の学生がオルレアン大学へ進学していた。それゆえ、パリに隣接しているとは言え、これらの司教区出身の学生はパリ大学において少数であり、その結果、ソルボンヌ学寮にもほとんど受け入れられていないものと考えてよからう。

最後に、一五世紀後半におけるイベリア半島出身者の学生の激増を指摘することができる。

一四世紀から一五世紀前半を通じて、ソルボンヌ学寮に

おける彼らの数は、決して多くはなかった。少なくとも一五世紀初頭まで、イベリア半島出身の学生たちは地元のサラマンカ、パレンシア、ヴァラドリッド大学へ進学するか、地理的に比較的近いアヴィニョンやトゥールーズといった南フランスの大学、またはイタリアの大学へ進む傾向が強かった。

しかし、ソルボンヌ学寮においては、一四七〇年代から一四八〇年代にかけて、イベリア半島出身の学生の受け入れが飛躍的に増加している。一五世紀前半において、ソルボンヌ学寮のイベリア半島出身学生は多くても一〇年に二人しか受け入れられていなかったのに対し、一四七〇年代には四人、一四八〇年代には七人、一四九〇年代には五人が受け入れられている。一五世紀末に、ジェロニモ・パドロによって、パリにスペイン人学生街が形成され、一五二八年にイグナティウス・デ・ロヨラがパリ大学へやってきた時には、相当数のスペイン人学生がいたことから明らかのように、一五世紀後半には、パリ大学におけるスペイン人学生の絶対数が増加し、ソルボンヌ学寮におけるスペイン人学生の増加はその反映と考えると差し支えないであろう⁽²¹⁾。ソルボンヌ学寮におけるイベリア半島出身学生数の増加の時期は、スペイン統一王国の成立と機を一にしていることから、この政治的事件がスペイン人学生の増加に影響

を与えたことが考えられる。一四七四年、カスティリア女王イザベルとアラゴン王フェルディナンドの結婚によって、スペイン統一王国が成立した。カトリック両王は、統一王国の成立当初から、「信仰の擁護者」としての立場を明確にし、カトリック信仰の下に国民統一の強化を推進してレコンキスタの完成を目指す一方で、サラゴサ大学、シグエンサ大学、アルカラ大学を次々と創設し、王国の知的向上と有能で信仰心に篤い官吏の養成を図った。しかし、当時のスペインにおける教育水準は決して高いものではなかった⁽²²⁾。それ故スペイン国王は、一四世紀後半以来、神学教育の独占権は失われていたものの、未だカトリック神学の牙城としての権威を有していたパリ大学から進学教師を招聘するとともに、パリへ多くのスペイン人学生を送ったのである。そして、ソルボンヌ学寮は彼らを受容する役割を果たしたと考えられる。

また一四五〇年代まで、ソルボンヌ学寮に受け入れられていたイベリア半島出身の学生は全てアラゴン王国の出身者であった。一四世紀まで、イベリア半島にはサラマンカ大学とパレンシア大学しか存在しなかった。いずれもカスティリア王国の領内であり、それゆえ一三世紀には、カスティリアと敵対関係にあるアラゴン王国出身の学生はフランスやイタリアの大学へ進む傾向にあった。その多くは、

トゥールーズを初めとする南フランスの大学で就学したが、パリ大学を始めとする北フランスの大学へ進学するものも少なからず存在していた。一四世紀の歴代アラゴン王は、こうしたカステイリアへの敵対心から教育政策にも力を注ぎ、領内にレリダ大学、ペルピニャン大学、ウエスカ大学を創設する一方で、フランスやイタリアの大学にも多くの学生を送り出し続けていた。アラゴン王マルティヌス一世は、ソルボンヌ学寮の学監に宛てて送った一四〇七年六月二七日付の書簡において、ソルボンヌ学寮におけるアラゴン出身の学生一名のために奨学金を与えてくれるように嘆願しており、同年にアラゴン出身の一学生がソルボンヌ学寮に受け入れられている。⁽²³⁾一四七〇年代以降、ソルボンヌ学寮におけるイベリア半島出身学生が増加すると、カステイリア王国やナヴァール公国の出身者も多く見られるようになる。このことからまた、一四七〇年代にソルボンヌ学寮においてイベリア半島出身の学生が急増したと、スペイン統一王国の成立の関連性を読み取ることができる。

(ii) 修道会士系学生

ソルボンヌ学寮は、そもそも一三世紀中葉のパリ大学における対托鉢修道会士闘争を契機として、托鉢修道会の神学院 (*studium*) に範をとりながら、それに対抗して創設

された在俗聖職者系学生のための施設だったため、当初は修道会士がソルボンヌ学寮に受け入れられることはなかった。⁽²⁴⁾しかし、両者の対立が緩和されるにしたがって、一四世紀の半ば頃から、修道会士がソルボンヌ学寮の中で見出されるようになる。ただし、そのほとんどは正規成員としてではなく、準成員としてであった。ソルボンヌ学寮における修道会士五三人の所属修道会ごとの内訳は以下の通りである。ベネディクト会三三人(四一%)、クリュニー会一六人(一九%)、アウグスティヌス会六人(一一%)、ヴァル・デ・ゼコリエ二人(四%)、プレモントレ会、聖アウグスティヌス隠修士会、シトー会、フランチェスコ会が各一人(各二%)、所属修道会不明六人。ベネディクト会とクリュニーを合計すると、実にソルボンヌ学寮における修道会系学生の七〇%がベネディクト会系の修道士であり、托鉢修道会系の学生は僅か四%に過ぎない。一方で、一五世紀のパリ大学におけるベネディクト会系学生の数は、托鉢修道会系の学生に比してかなり少数であった。参考までに、その割合を示すと以下の通りになる。ドミニコ会二五・八%、フランチェスコ会一六・八%、カルメル会一六・八%、聖アウグスティヌス隠修士会一三・六%、シトー会一一・八%、クリュニー会六・二%、ベネディクト会四・八%、プレモントレ会〇・七%、聖アウグスティヌス律修参事会

○・五%、その他三%。つまり、パリ大学における修道会系学生の七三%が托鉢修道会系の学生であった。

一五世紀を通じて恒常的に一定数の修道会士がソルボンヌ学寮に受け入れられているのは、クリュニー会を含めたベネディクト会士のみで、他の修道会士は例外的に一人か二人が受け入れられているに過ぎない。特に刮目に値するのは、一四六〇年代におけるベネディクト会士の激増である。

一五世紀の前半を通じて、彼らは一〇年に一人か二人の割合でソルボンヌ学寮に受け入れられていたが、一四六〇年代には一三人が受け入れられている。一四六三年付けのソルボンヌ学寮の定例会議事録によると、「ベネディクト会は、ソルボンヌ学寮における彼らの修道会士の家賃として、二ソリドゥス六デナリウス支払う」ことが決定されている。⁽²⁵⁾ソルボンヌ学寮に多くのベネディクト会士が受け入れられた理由としては、ベネディクト会が托鉢修道会系の修道会とは違って、独自の教育組織を整備していなかったという事実が挙げられる。早くから神学研究に関心を示し、独自の教育組織を整備していた托鉢修道会に対して、旧来のベネディクト会、シトー会、聖アウグスティヌス律修参事会には、神学研究に対する不信任や敵意が、一四世紀まで根強く残っていた。シトー会出身の教皇ベネディクト一二世は、このような状況を憂慮し、一三三五年にシトー会

に対し、一三三六年にベネディクト会に対し、そして一三三九年には聖アウグスティヌス律修参事会に対し、それぞれ、研究組織を整備し、神学研究を推進するように呼びかける教令を發布するが、修道会内の保守派の強硬な反対にあい、失敗に帰する。これより以前、一三二九年に、ソルボンヌ学寮のすぐ裏手に、ベネディクト会士のためのマルムーティエ学寮が創設されたが、規模が小さく、その活動の実態については不明である。ベネディクト会において、再び改革が試みられるのは一五世紀半ばのことである。一四五八年二月二日、教皇シクストゥス四世は、ベネディクト会系のマリ・ド・ブルターニュ修道院に教令を発し、修道院改革を推進するように呼びかけた。⁽²⁶⁾この改革は、すぐにマルムーティエ修道院にも波及し、一四六六年には、当時既に機能しなくなっていたパリのマルムーティエ学寮の再建が図られた。新しい規約の起草には、当時ソルボンヌ学寮の学生であったトマ・ド・クールセルとジャン・ド・モンティニーが携わっている。一四六〇年代におけるソルボンヌ学寮でのベネディクト会士の増加には、このようなベネディクト会における修道院改革が影響していると考えられる。そしてソルボンヌ学寮は、一四世紀一五世紀を通じて、ベネディクト会における教育改革に協力するとともに、独自の教育組織を持たないベネディクト会系学生を受

け入れる役割を果たしたと考えられる。

III おわりに

一四一八年から一四三六年まで、パリのイングランド占領時代には、治安と経済状況の悪化から多くの学生たちがパリを退去し、パリの学生人口は著しく減少した。ソルボンヌ学寮では、一四一七年には四〇人近くいた学生が、一四一八年には二七人、一四二一年には一二人にまで減少した。以後も学生数は低迷し、一四四〇年代の初めには五人前後の学生しかいなかったと考えられる。ソルボンヌ学寮の学生数が再び増加に転じるのは、一四四〇年代の後半のことである。細かな増減はあるものの、一四四六年には八人、一四五五年には一二人、一四六四年には二四人、一四八〇年には三〇人にまで回復した。一四五二年に、フランス王権の主導の下、枢機卿ギヨーム・デトゥットヴィルによる大学制度改革が遂行され、一四六〇年代にはナヴァール学寮の再建が着手されているように、パリ大学が百年戦争末期の政治的混乱と治安悪化から更生するのは、一四五〇年代以降のことであったと考えられる。ソルボンヌ学寮における学生数の推移は、こうしたパリ大学の混乱に伴う衰退と復興の動きに符合する。

一五世紀にヨーロッパ各地に叢生した新設大学は、ヨーロッパ各地における学生の絶対数を飛躍的に増加させる一方で、必ずしもパリ大学で学ぶ外国人学生の減少を引き起こすものではなかった。しかし、学芸学部と上級三学部（神学、教会法学、医学）では区別して考える必要がある。一三世紀以来、パリ大学の権威はカトリック神学の牙城としての神学部の権威に由来した。しかし一四世紀の後半には、シスマの影響でヨーロッパ各地の大学に神学部が創設されたことで、パリ大学の神学教育の独占権は失われていた。また、一五世紀における官僚制の発達は、学生の知的関心を神学よりも法学に惹きつけるようになった。神学研究に専念するのは、托鉢修道士か在俗聖職者の中でもごく一握りのエリートであった。すなわち、確かに一五世紀においてもパリ大学は遠隔地からの学生を引きつけていたが、彼らを引きつけていたのは学芸学部や教会法学部であり、神学部ではなかったと考えられる。

一五世紀の末までに、パリ大学神学部の在俗聖職者系学生は、ソルボンヌ学寮とナヴァール学寮という二大学寮に集中するようになった。恐らく、一五〇〇年頃には神学部の在俗聖職者系学生の約八〇%がこの何れかの学寮に籍を置いていたものと考えられる。⁽²⁷⁾つまり、この二つの学寮の学生の出身地分布を総合すれば、当時のパリ大学神学部の

人的吸引圏を知ることができるのである。ソルボンヌ学寮とナヴァール学寮における学生の出身地分布を鑑みるに、パリ大学神学部における地理上の人的吸引圏は、一五世紀を通じて縮小する傾向にあった。一五世紀の前半に存在していた遠隔地出身の学生は、同世紀の半ばには姿を消した。また、一五世紀前半において、パリ大学に最も多くの学生を供給していたルーアン司教区を初めとするノルマンディー地方の出身学生は、恐らく一四三二年にカーン大学が創設された影響で、同世紀の後半に激減する。つまり、一五世紀の後半において、ソルボンヌ学寮の学生の多くは北フランスの出身者であり、とりわけフランドル、ピカルデー、シャンパーニュ、イル・ド・フランスからブルゴーニュにかけての一带の出身者が大半を占めていた。一方で、一四七〇年代以降イベリア半島の出身者が急増する。スペイン統一王国が成立し、レコンキスタの完成へ向けてイベリア半島の人々の間に宗教意識が高揚する中、スペイン国王は王国の知的向上と有能で信仰心に篤い官吏の養成を図るべく、新たな大学を創設するとともに、パリ大学から神学者を招聘し、また多くの学生をパリ大学の神学部へと送り出した。そして、ソルボンヌ学寮は、彼らを受容する役割を果たしたのである。更に、一四六〇年代にはベネディクト会系学生も増加する。ベネディクト会は、托鉢修道会とは

異なり、長い間パリに独自の教育施設を有していなかった。それは、彼らの中に神学研究に対する不信感が根強かった故であるが、一五世紀半ばにベネディクト会における教育改革が試みられた時、それに協力し、パリで進学を学ぶ彼らを受容する役割を果たしたのがソルボンヌ学寮であった。

註

- (1) Favier, J., *Nouvelle histoire de Paris: Paris au XV^e siècle (1380-1500)*, Paris, 1974, pp.68-79
- (2) Sullivan Th., *Parisian licentiates in Theology, A.D. 1373-1500, A Biographical Register, vol. I, The Religious orders (Education and society in the Middle Ages and Renaissance, vol. 18)*, Leiden, 2004' 及び Maître H.-B., "Les Théologastres de l'Université de Paris au temps d'Erasmus et de Rablais" dans *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, Tome 27-1, 1965, pp.248-264
- (3) Le registre de prêt de la bibliothèque du collège de Sorbonne 1402-1536 (édité par J. Vieliard), Paris, 2000
- (4) 目録における蔵書総数と内訳の合計に誤差があるが、その要因は恐らく、一三九〇年に作成され、一三二〇年に補完された蔵書目録を基にした目録を使用しているため、目録に登録されていない蔵書が多数存在したためと考えられる。グルニエ・ブラウンシュヴァイクによると、この当時、ソルボンヌ学寮図書館における実際の蔵書総数は一八

- 二五冊のあと。Grenier-Braunschweig, L., "La prise des manuscrits du collège de Sorbonne au Moyen Age" dans *Mélanges offerts à Gérard Oberlé pour ses 25 ans de librairie: 1967-1992*, 1992, pp.327-341
- (5) Marichal R., *Le livre des prieurs de Sorbonne* (1431-1485), Paris, 1987
- (6) 奉仕学生とせし学寮の正規教員とあへ《socii》又ち共同体全体の召使として奉仕する者らと、学寮に住む者が認められ、生活を保障された学寮学生の学生とあへ。学寮の正規成員の多くは、神学部の学生とあへると同時に、神学部の教師とあへたため、彼らの多くは師範課程とあへたためといはれる。註しへせ、Waijers, Olga "Le vocabulaire du collège de Sorbonne" dans *Vocabulaire des collèges universitaires (XIII^e-XIV^e siècles)*, 1993 及び註釋「十五世紀のフランスの学寮とあへたあへ《clericus》について」『中世田大学大学院文学部研究紀要』第五十一輯、二〇〇六を参照。
- (7) Tanaka M., *La nation anglo-allemande de l'Université de Paris à la fin du Moyen-Age*, 1333-1453, (Mélanges de la bibliothèque de la Sorbonne), Paris, 1990, p.
- (8) Tanaka M., op.cit., p.49
- (9) Holme et Maliniemi, *Les étudiants finlandais à Paris au Moyen-Age*, pp.18-24
- (10) Watt D.E.R., "Scottish Masters and Students at Paris in the Fourteenth Century" dans *Aberdeen University Review*, 36, 1955-56, pp.169-180
- (11) Watt D.E.R. *Les universités d'Ecosse depuis la fondation de l'Université de St-Andrews jusqu'au triomphe de la Réforme* (1410-1560), 1915
- (12) Gabriel, A.L., "Intellectual contacts between the university of Louvain and Paris in the 15th century" dans *The Paris Studium*, 1992, p.240
- (13) Verger, "Le recrutement géographique des universités françaises au début du XV^e siècle d'après les suppliques de 1403", dans *Mélanges de l'Ecole française de Rome Moyen Age et temps modernes* p.145
- (14) Gabriel, A.L., op.cit., pp.205-209
- (15) *ibid.*, pp.214-238
- (16) Guenée, S., *Les universités françaises des origines à la révolution*, 1982, pp.70-72
- (17) Kibre P., *The Nations in the Mediaeval Universities*, Cambridge, 1948, pp.18-19
- (18) Verger, J., op.cit. p.147
- (19) *ibid.*, p.157
- (20) Gorochoy, N., *Le collège de Navarre de sa fondation au début du XV^e siècle*, 1997, p.156
- (21) Verger, J., "Les étudiants méridionaux à Paris au Moyen Age", dans *Annale du Midi*, 1990, p.102
- (22) Verger, J., *Les gens de savoir en Europe à la fin du Moyen Age*, 1997, p.67

- (23) Le registre de prêt de la bibliothèque du collège de Sorbonne, Doss.32, article no.45
- (24) Glorieux, op.cit.,
- (25) Marichal, op.cit., no.524
- (26) Renaudet, *Pré-renaissance et humanisme à Paris pendant les premières guerres d'Italie (1494-1517)*, pp.185-189
- (27) Maître H.-B, op.cit., p.251